第三講 パウロの自己紹介(二) 第一章一節、二節の研究 (二月三十日)

羅馬書一章一節を原語の順序の儘に記せば

パウロ イエス・キリストの僕 召されたる使徒 神の福音のために選ばれたる

となる、之を文法的に云へば「パウロ」なる語を三箇の形容詞(Adjective phrase)を以て修飾(modify)したのである、英譯聖書に於て Paul, a servant of Jesus Christ called to be an apostle, separated unto the gospel of God とあるは完全なる譯ではないが、大體に於て原文の文脈は保たれて居るのである、今もし之を分解すれば左の如くなる。

(第一) イエスキリストの僕なるパウロ

(第二) 召されたる使徒なるパウロ

(第三) 神の福音のために選ばれたるパウロ

即ち羅馬書一章一節は右の三思想より成るものである、その中第一は前講に於て説明せし通り頗る重要な意味を有するものであるが、第二、第三も亦これに劣らざる重みを有するものである。

パウロは先づ自己を「イエス・キリストの僕」と稱した、これコリントより遙か羅馬府に架したる弓形橋アーチの第一石である、キリストの僕と云ふは廣き語にして凡ての基督者を指すものである、キリストの僕(奴隸)たる覺悟なき者は、他に如何に優秀なる特性を有すとも基督者と稱することは出来ない、羅馬府の信者にして眞の基督

者である上は必ずキリストの僕であるべき筈である、キリストの僕たる點に於てはパウロと彼等との間に何等の差別がない、よし兩者は他の凡ての點に於て相違せりとも少くとも此一點に於て全く同一である、パウロは先づキリストの僕と記して何よりも先に此事が彼の第一特徴である事を示したのであるが、同時にまた羅馬府の信徒と共通なる此一點を先づ記して我と彼等との間に一脈の溫流を通ぜしめたのである、貴き愛の技巧よ！ 多分羅馬府の信徒は書翰の劈頭に此句を讀みて少からぬ安心やすみと暖味ぬくまを感じたことであらう。

然しパウロは彼等との共通點に何時までも佇立「ちよりつ」して居ることは出来なかつた、彼は進んで「召されたる使徒」と述べた、これ彼等と自分との第一の相違を明らかにし、併せて神より與へられし自己の權能を示したものである、抑も「使徒」の意義如何、原語 *apostolos* (アポストロス) は *apostēlus* (アポステロー) なる動詞より出でし名詞にして、此動詞は「使者を遣おくる」を意味する語である、さればアポストロスは、遣おくはされし人、使者、特使を意味する、ピートの羅馬書註解は此語を解して *one sent on some special business* (或特別の仕事のため遣はされし人) となして居る、此意味に於ては此語は聖書の專有語ではなくして普通一般の語である、しかし勿論聖書にありては之が特殊の意味を荷ふものとして用ひられて居る、即ちグリーンンの希臘文典に記さるゝ如く之は a messenger of Christ to the world (キリストより此世への使者) の意である、然らば凡ての時代に於ける凡ての福音宣傳者は悉くアポストロスであるか、或意味に於て然り、しかし此語は新約聖書に於ては歴史的制限の下に記されて居る語である、即ち歴史的に初代教會に限られた語としてあるのである、初代教會以後に於ても多くの優秀なる傳道者は輩出した、彼等は明らかに「キリストより此世への使者」である、しかし新約聖書に記

さるゝアポストロスではないのである。

かく使徒とは初代教會特有の語であるが、それに又廣狭の二義がある、狭義に於てはキリストの生前に使徒に任命せられたる「十二使徒」を指すのである、此意味に於てはパウロは勿論使徒ではない、換言すれば彼は十二使徒の一人ではない、次ぎに廣義に於ては使徒なる語は第一級の傳道者を意味する、「神は第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、その次に異能を行ふ者、次に病を醫す能を受けし者、救濟する者、治理者、方言を云ふ者を教會に置き給へり」(コリント前十二の二八)とあり、又「其賜ひし所は使徒あり、預言者あり、傳道者あり、牧師あり、教師あり」(エペソ書四の十一)とある、即ち廣義の使徒は教會の第一人者を意味する、バルナバ、主の兄弟ヤコブの如きは此意味の使徒であつた、パウロも十二使徒の一人でなかつた以上先づ此意味の使徒であつたのである。

かく使徒なる語は初代教會に於て凡ての傳道者を指した語ではなく或種の傳道者を指した語である、此意味に於ては使徒を大使(Ambassador)と見るを最も便とする、抑も大使とは自國の主權者の代理として他國に赴ける者である、彼は異邦にありて自國の主權者の代理者として立つものである、故に四方に使用して君命を辱めざるを好箇の大使とする、寔に貴き地位である、パウロが使徒であると云ふのはキリストの大使であると云ふ意味である、そして彼は特に異邦人への使徒である、然り異邦使徒(Gentile Apostle)である、即ちキリストより異邦に遣されし者であつて、異邦人の間に於けるキリストの代理者である。

パウロは先づキリストの僕(奴隸)と稱し次ぎにキリストの大使と稱す、一度奈落の底に落ちて忽ち九天の上

に登るが如くである、之を捉へて矛盾と稱して彼を貶する人がある、其思想を奇怪として排する人がある、しかし之は前後矛盾ではなくして對照である、奇怪ではなくして奇勁である、げにパウロは大對照の人である、其人自身が種々の相反性を一身に於て兼ねた人であり、従つて其思想の中に種々の相反すると見ゆるものが共存して居るのである、さはれこれ對照であつて決して前後矛盾ではない、僕と云ふも眞であり大使と云ふも眞である、彼の地位は或意味に於て極めて低く或意味に於て極めて高い、従つて彼は或場合に於て極めて謙卑であり或場合に於て極めて自信に富む、彼は羅馬の兄弟たちと同じ地位のものであつて又別の地位のものである、彼等のために奉仕する僕であるが又彼等の上に權を取る使徒である、彼は「更に多くの人を得んために自ら己を凡ての人の奴隸とな」した人であつた（コリント前書九の十九）、併し「我がキリストに效ふ如く汝等我に效ふべし」と云ひて己を信者の師表となす程の自信のあつた人であつた（同十一の一）。

使徒である、けれ共唯の使徒ではない、「召されたる」使徒である、「召されたる」の一語は我等をしてイスラエルの古き偉人を想起せしめる、始祖アブラハムは「汝の國を出で汝の親族に別れ汝の家を離れて我が汝に示さん其地に到れ」とのエホバの召を受けて「エホバの己に言ひ給ひし言に従ひて出で」往いたのである（創十二章）、國祖モーセは神の山ホレブに民族救出の聖召を受けて辭退しました逡巡せしも遂に之を受くるの餘儀なきに至つたのである（出第三章）、イザヤはエホバに罪を潔められて召されしため其召に應じて立つに至り（イザヤ書第六章）、エレミヤは「われ汝を腹に造らざりし先に汝を知り、汝が胎を出でざりし先に汝を聖め、汝を立て、萬國の豫言者となせり」との招きに應じて、一度は辭退せしも遂に豫言者の聖職に就いたのである（エレミヤ一章）、孰れも

自ら進んで其重責に當つたのではない、神に召されて辭退せしも許されず遂に餘儀なくして就任したのである、
自薦に依らず聖召に依る、其處に弱味があり又強味がある、然り人による弱味がある故に神による強味があるの
である。

パウロ自身が實に然うであつた、「彼は十二使徒等と同様彼の職に召されたのである、彼は自ら好んで又は偶然
の機會でそれに達したのではない」（マイヤー）、そして召されて使徒職に就いたと云ふ事は勿論彼の内心に神の
此聖召を感じた事であつて、何等外形的の事象として現はれた事ではなかつた、ためにパウロは自ら僭して使
徒と稱すとの非難が所々方々にあつた、彼の敵人の中には此聲が格別にも高く擧がつた、殊に彼が基督教迫害者
であつたと云ふ過去の暗い歴史が彼の位置をして益々不利ならしめた、さりながら聖召の一事は凡て斯る非難攻
撃の毒矢を拂ひのけ得て餘りあるものであつた、誰か主の召し給ひし所の者に向つて僭越との惡名を與へて正し
きを得よう、パウロが加拉太書の劈頭第一に「人よりに非ず又人に由らずイエスキリストと彼を死より甦らし
父なる神に由りて立てられたる使徒パウロ」と高らかに叫んだのも哥林多前後書の處々に己の使徒職についての
辨護的筆法を揮つたのも、これ皆我心の前に敵人の批難攻撃を立たせての戰なのである、哥林多前書九章を見よ、
同後書三章、四章、六章、十章、十一章、十二章を見よ、戰塵濛々たる中に於ける彼の己の使徒職の擁護は實に
に精彩奕々たるものがある、まことに偉大なる靈魂の心情ありのまゝの發露として天然其者の如く純にして美で
ある、羅馬書を記す頃は此擁護戰は略ぼ下火となつた、彼の勝利はもはや鮮かであつた、彼は今や押しも押され
もせぬ大使徒である、しかし彼は過ぐる幾年かの辛き經驗を想ひ出さざるを得なかつた、彼は幾年も用ひし同じ

武器を復た取りて「召されたる」の一語を添加せざるを得なかつた、語は一字である（原語クレートス）、しかし意味は無量である、そして此語を記し、時の彼の感慨も亦無量であつたこと、我等は思ふ。

教會に頼らず教派を待まず獨り立つて福音を世に布きたるパウロは偉大なる獨立傳道者であつた、彼の使徒たるは、「召されたる」といふ一事實の外何等の據所なきものであつた、併し乍ら傳道者として「無くて叶ふまじきもの」は此一事であつて、他の凡ては有るも無きも可きものである、そして他の凡てを具備するとも此一事なくば傳道界の無資格者である、凡て眞の傳道者は自ら進で傳道者となれる者にあらず、神に召されて否應なしに此務めに當るに至りし者である、かゝる者に於ては形の上の資格は有るも可無きも可である、汝正規の神學校を卒へ牧師試験に及第せし故に眞の傳道者なりと云ふか、去れよ、斯る傳道者は神の國に用なき者である、汝その知識と徳望と技能との故に好適の傳道者なりと云ふか、去れよ、斯る傳道者は僭越虚罔の徒である、唯召されて傳道者となりし者のみ、よし其外形は「世の汚穢また萬の物の塵垢の如」くなるとも眞の傳道者である、而して實は單に傳道者に限らず凡て眞の基督者は「召されたる」基督者である、自ら成らんと欲して成りしに非ず、父によりて信仰を與へられ、父の聖召によりて信仰生活に入つたのである、勿論洗禮の有無、所屬教會の如何の如きは問題とならぬのである、併し乍ら「召されたる傳道者」、「召されたる基督者」と自稱する者必ずしも悉く召されたる傳道者、召されたる基督者ではない、其中に偽りて斯く稱するものがあり又幻想によりて斯く信ずる者があつた、眞ある所、偽は影の如く伴ふ、これ大に注意すべき點である。

第一節の含む第三思想は、「神の福音のために選ばれたるパウロ」である、神と云ひ、福音と云ひ、選ばれたる

と云ふ、孰れも重要な語である、「選ばれたる」は選別されたると譯するを可とする、原語 *aphorismos* (アフォーリスメノス) は、別にせられたる、他より分たれたる、選び置かれたる等の意を有する語である(英語の *separated; set apart*)、或る時の用のために前以て選別し置かれたるを意味する、パウロは福音宣傳の使命のために斯く選別し置かれし器である、これ彼に根深き確信であつた、然らば聖召と選別の區別如何との問題が起る、この問題に光明を投ずるものは數年前に彼の發したる語である、即ち加拉太書一章十五節に「然れども我母の胎を出でし時より我を簡び置き恩をもて我を召し給ひし神」とある、此「簡び置き」は羅馬書一章一節の「選ばる」と同じ語、又「召し」は羅馬書一章一節の「召されて」と同じ語である即ち彼は豫め簡び置かれて或期間を経て後召されたのである、彼は元來「神の福音のために選別せられたる」器にして時來つて遂に「召されたる使徒」となりし者である。

人は種々の器として選ばる、福音のために選ばれし人の中にも或は豫言者あり、教師あり、牧師あり、或は全教會の統率に當る器あり、或は事務を執り又は施濟に従ふ器あり、種々様々である、そしてパウロが福音のために選ばれたと云ふは勿論福音宣傳のために選ばたのである、ゴオデーの如きは福音なる語は新約聖書に於ては寧ろ福音宣傳を意味すると断定してゐる、その見方の正否は別としてパウロが事實上福音宣傳のために選ばれたる器なることは誰人も認むる所である。「福音」は原語にて *euangelion* (ユーアンゲリオン) と云ふ、實に美はしき語である、美はしき思想を傳うる語は美はしき響を有す、前に「奴隸」と云ふ慘ましき(文字の表面は)語を發し次ぎに「福音」のために選ばると美はしき語を記す、茲に又パウロ独特の對照があるのである、ユーア

ンゲリオンは「善き音信」を意味す、英語に於て gospel (ゴスペル) が good spell 即ち「善き語」を意味すると似てゐる、パウロは實に此善き音信のために選ばれたのである、神の怒りの器としてではない、神の刑罰を世に傳ふる使者としてではない、實に神の善き音信を世の民に傳ふる使人として選ばれたのである、何者の榮譽か之に如かん、何等の幸福か之に比せん。

羅馬書の劈頭にユーアンゲリオン（福音）の一語ありて此句の性質は明かである、パウロが福音の使徒たりとの事は羅馬書が福音の大證明書たることを示すのである、而して福音とは喜びの音信、歡喜の傳達、赦免と、恩恵と、平安とを盛れる一大宣言である、そして之を述ぶるが羅馬書である、歡喜を以て始まり歡喜を以て終るは此書である、その中に罪の指摘がないではないが、是光明に到達せんがための前提たる暗黒であつて、決して暗黒を以て終る所の暗黒ではない、恩恵は此書の基調である、歡喜と平安とに此漲溢する空氣であるこれパウロ彼自身が恩恵の上に確立し歡喜と平安とに漲溢せる人なるがためである。

一節を全体として回顧せよ、パウロはイエスキリストの奴隸であり、召されたる使徒であり、神の福音のために選別せられた者であると言ふ、此中に彼の謙遜あり確信あり、信賴あり覺悟あり、感謝あり歡喜あり、實驗を盛りし語なると同時にまた教訓に富める語である、羅馬の信者は此書翰を開いて先づ此第一節に接せし時恰も戀人よりの便の如く言ひ知らぬ喜悅を味はつたことであらう、曾て此世が産みたる最大の基督者、最大の傳道者たる異邦使徒パウロの書翰冒頭の語として、我等は羅馬書一章一節に限りなき興趣を覺ゆるものである。

次ぎは第二節の研究である、「この福音は從前より其豫言者たちに託りて聖書に誓ひ給へるものにて」と言ふ、

豫言者なる語は狹義に於てはサムエル以後豫言の聖職に就きし者を指すのであるが、廣義に於てはモーセまで遡ることが出来又モーセ以前の謂ゆる「列祖」を含むこともある、而してメシヤの出現の豫言は實に舊約聖書全体を通じて存するものにして、舊約の基調は明かにメシヤ豫言である、故に第二節の「豫言者たち」は、最大廣義に取るべきものである、洵に神は其豫言者たちを通してメシヤの出現を聖書に於て誓ひ給ふた、さればイエスは「汝らの先祖アブラハムは我日を見んことを喜び」（ヨハネ傳八の五六）と云ひ、又「もしモーセを信ぜば我を信ずべしそはモーセ我事を記したればなり」（同五の四六）と云ふた、又主の復活後福音宣傳の最初に於てペテロは使徒の所信を代表して云ふた「モーセ我等の先祖たちに告げて曰ひけるは、主なる汝等の神は汝等の兄弟の中より我に似たる一人の豫言者を起さん……又サムエルより此來語りし所の豫言者も皆あらかじめ此日を指して云へり」と、かく神は重ね重ねその豫言者を通して福音確立の日あるべきを誓ひ給ふた、それは我等が舊約聖書の各處に發見する所にして、一度豫言者の筆端此事に觸るゝや、その想その辭共に高調に達し、花の如き美はしさと蜜の如き甘さとが其言葉を彩りて妙なる希望の美曲を奏で出づるのである、舊約聖書をして希望満々たる書たらしむるは實に之である、げにメシヤ豫言は舊約の肉の肉、骨の骨、髓の髓、いのち生命の生命である。

パウロは斯くの如き巨大なる舊約的背景を第二節に於て記したのである、そして自己の唱道する福音が決して自己創造の教説にあらずして古へより豫言者の豫め示したる事——豫言者を通して神の誓ひ給へる事——なるを主張したのである、茲にパウロの據り所がある、茲に過去數千年が彼の後援者として立つ、彼が聖書を以て自己宣傳の福音を擁護せしめし處に彼の周到なる用意と、又眞正の傳道者たる特徴が存する、我等は古き聖書に據る

時最も確實である、自己發明の新説を唱道する時最も不確實である、それは古き聖書の教ふる所は永久に新しきに反して、人間所造の新説は忽ち舊説となりて路傍に遺棄せらるゝがためである、今や人は古き聖書を棄て、徒らに新説より新説へと轉々す、そして聖書に示さるゝ神の道を閑却して人の所造にかゝる種々の學說教義を説明し、講述し、研究し、遵奉し、以て得々として居る、げに危ふき極みである、ああ人よ早く空しき努力を去れ、而して永久に新且眞なる神の言に頼れ。

最も進歩的の人なりしパウロは又最も保守的の人であつた、彼は古き聖書に頼り、古き舊き豫言を以て最も新しき福音を擁護せしめた、彼を稱して矛盾の人と云ふ勿れ、寧ろ偉大の人と云へ、進歩と保守とを一身に兼ねて人は初めて偉大である、凡そ人類の歴史に一大時期を劃せし偉人は概ね此種の人である、ルーテルは如何、クロムエルは如何、リンカンは如何、グラッドストーンは如何、グラッドストンの進歩的大政治家たるは誰人も知る處であるが、其信仰の頗る保守的なりしも亦著明の事實である、其他ルーテル、クロムエル等孰れも敬虔なる使徒時代的信仰の所有者であつた、進歩と保守と一致する所、舊と新との融合する所、そこに眞醇なるものが生起する、パウロほど進歩的の人はなく又パウロほど保守的の人はなかつた、これ彼が人類中最偉大の人たりし明かなる證據であると思ふ。

ローマ書(ローマ人への手紙)一章一節を原語の順序のままに記すと、

パウロ イエス・キリストの僕 召されたる使徒 神の福音のために選ばれたる

となる。これを文法的にいうと、「パウロ」という語を三つの形容詞句(Adjective phrase)で修飾(modify)したのである。英訳聖書にある "Paul, a servant of Jesus Christ called to be an apostle, separated unto the gospel of God" は完全な訳ではないが、おおむね原文の文脈は保たれているのである。今もしこれを分解すれば以下のようになる。

(第一) イエス・キリストの僕であるパウロ

(第二) 召された使徒であるパウロ

(第三) 神の福音のために選ばれたパウロ

すなわち、ローマ書第一章一節は、右の三つの思想から成り立つものである。そのうち第一の思想は前講で説明した通り、非常に重要な意味を持っているが、第二、第三もまたこれに劣らない重みを持っているのである。

パウロはまず、自分を「イエス・キリストのしもべ」と称した。これはコリントから遠く離れたローマの都へ架けられたアーチ橋の第一石である。「キリストのしもべ」というのは広い言葉で、すべてのキリスト教徒を指すものである。キリストのしもべである覚悟のない者は、他にどんなに優秀な特性を持っていても、キリスト教徒

と称することはできない。ローマの信者が真のキリスト教徒である以上、必ずキリストのしもべであるべきはずである。キリストのしもべであるという点において、パウロと彼らの間に何らの差別もない。たとえ両者が他のすべての点で相違していても、少なくともこの一点においては完全に同一である。パウロはまずキリストのしもべと記し、何よりも先にこのことが彼の第一の特徴であることを示したのであるが、同時にまたローマの信徒と共通であるこの一点をまず記し、私と彼らの間に一筋の温かい流れを通わせたのである。何と尊い愛の技巧であろうか！恐らくローマの信徒は書簡の冒頭でこの句を読み、少なからぬ安らぎと温かみを感じたことであろう。

しかし、パウロは彼らとの共通点にいつまでも立ち止まっていることはできなかった。彼は進んで「召された使徒」と述べた。これは、彼らと自分との第一の相違を明らかにし、あわせて神から与えられた自分の権能を示したものである。そもそも「使徒」の意義はいかなるものであろうか。原語の *apostolos* (アポストロス) は、*apostere laos* (アポステロー) という動詞から出た名詞で、この動詞は「使者を送る」を意味する語である。それゆえ、アポストロスとは、遣わされた人、使者、特使を意味する。ビートの羅馬書註解はこの語を解釈して "one sent on some special business" (ある特別な仕事のために遣わされた人) としている。この意味においては、この語は聖書の専有語ではなく、普通一般の語である。しかしもちろん聖書においては、これが特殊な意味を担うものとして用いられている。すなわち、グリーンのギリシア文典に記されているように、これは "a messenger of Christ to the world" (キリストからこの世への使者) という意味である。それならば、すべての時代におけるすべての福音宣伝者はすべてアポストロスであるかという点と、ある意味ではそうである。しかしこ

の語は新約聖書においては歴史的制限のもとに記されている語である。すなわち、歴史的に初代教会に限られた語としてあるのである。初代教会以後においても、多くの優秀な伝道者は輩出した。彼らは明らかに「キリストからこの世への使者」である。しかし新約聖書に記されているアポストロスではないのである。

このように「使徒」とは初代教会特有の語であるが、それにはまた広義と狭義の二つの意味がある。狭義においては、キリストの生前に使徒に任命された「十二使徒」を指す。この意味においては、パウロは当然使徒ではない。言い換えれば、彼は十二使徒の一人ではない。次に広義においては、「使徒」という語は第一級の伝道者を意味する。「神は教会の中に、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、そして力あるわざ、そして癒やしの賜物、援助、管理、種々の異言を備えてくださいました」(コリント人への手紙第一 十二章二十八節)とあり、また「こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました」(エペソ人への手紙四章十一節)とある。すなわち、広義の使徒は教会の第一人者を意味する。バルナバ、主の兄弟ヤコブのような者はこの意味の使徒であった。パウロも十二使徒の一人ではなかった以上、まずこの意味の使徒であったのである。

このように「使徒」という語は、初代教会においてすべての伝道者を指した語ではなく、ある種の伝道者を指した語である。この意味においては、使徒を大使(Ambassador)と見るのが最も便利である。そもそも大使とは、自国の主権者の代理として他国に赴いた者である。彼は異国にあって自国の主権者の代理者として立つものである。ゆえに、四方に使いして君命を汚さないのが立派な大使とされる。まことに尊い地位である。パウロが使徒

であるというのは、キリストの大使であるという意味である。そして彼は特に異邦人への使徒である。然り、異邦使徒 (Gentile Apostle) である。すなわち、キリストから異邦に遣わされた者であって、異邦人の間におけるキリストの代理者である。

パウロはまずキリストのしもべと称し、次にキリストの大使と称する。一度奈落の底に落ちてたちまち九天(天の最も高いところ)の上に登るがごときである。これを捉えて矛盾と称して彼を貶けなす人がある。その思想を奇怪として排斥する人がある。しかしこれは前後矛盾 (コントラディクション) ではなくして対照 (コントラスト) である。奇怪ではなくして奇抜である。実にパウロは大いなる対照 (グレートコントラスト) の人である。彼自身が様々な相反する性質を一身に兼ねた人であり、したがってその思想の中に様々な相反するように見えるものが共存しているのである。とは言え、これは対照であって決して前後矛盾ではない。しもべというのも真実であり、大使というのも真実である。彼の地位はある意味で極めて低く、ある意味で極めて高い。したがって彼はある場合には極めて謙虚であり、ある場合には極めて自信に富む。彼はローマの兄弟たちと同じ地位のものであって、また別の地位のものである。彼らのために奉仕するしもべであるが、また彼らの上に権威を持つ使徒である。彼は「より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷」となった人であった (コリント人への手紙一九章九節)。しかし「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私うものでありなさい」と言って、自分を信者の師表とするほどの自信があった人であった (同十一章一節)。

使徒である、けれどもただの使徒ではない、「召されたる」使徒である。「召されたる」の一語は、私たちにイ

スラエルの古き偉人を想起させる。創始者アブラハムは「あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」とのヤハウェの召しを受けて、「主が告げられたとおりに出」て行ったのである（創世記十二章）。国祖モーセは神の山ホレブで民族救出の聖なる召しを受けて、辞退し、またためらったが、遂にはそれを受け入れるより他ないことになったのである（出エジプト記三章）。イザヤはヤハウェに罪を清められて召されたため、その召しに応じて立つに至り（イザヤ書六章）、エレミヤは「わたしは、あなたを胎内に造る前にあなたを知り、あなたが胎を出る前にあなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」との招きに応じて、一度は辞退したが、遂に預言者の聖職に就いたのである（エレミヤ書一章）。いずれも自ら進んでその重責に当たったのではない。神に召されて辞退しても許されず、遂にやむなくして就任したのである。自薦によらず聖召による。そこに弱みがあり、また強みがある。然り、人による弱みがあるからこそ、神による強みがあるのである。

パウロ自身が実にそうであった。「彼は十二使徒たちと同様、彼の職に召されたのである。彼は自ら好んで、あるいは偶然の機会ですれに達したのではない」（マイヤー）。そして召されて使徒職に就いたということは、もちろん彼の内心に神のこの聖なる召しを感じたことであって、何らか外形的な事象として現れたことではなかった。そのため、パウロは自ら僭越にも使徒と称するとの非難が所々方々にあった。彼の敵の中にはこの声が格別が高く上がった。特に彼がキリスト教迫害者であったという過去の暗い歴史が、彼の立場をますます不利ならしめた。さりながら、聖召という一件は、すべてそのような非難攻撃の毒矢を払い除けるに余りあるものであった。

誰が主がお召しになった者に向かつて、僭越との悪名を与えて正当性を得ようか。パウロがガラテヤ書の冒頭第一に「人々から出たのではなく、人間を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によって、使徒とされたパウロ」と高らかに叫んだのも、コリント第一、第二の書簡の随所で自分の使徒職についての弁護的な筆法を振るったのも、これらはみな心の中で敵の非難攻撃を立てての戦いなのである。コリント書第一九章を見よ。同第二三章、四章、六章、十章、十一章、十二章を見よ。戦いの煙が濛々たる中における彼の自分の使徒職の擁護は、実に精彩を放つものである。まことに偉大な魂の心情がそのままに発露したものととして、自然そのものの如く純粹で美しい。羅馬書を記す頃は、この擁護戦はほぼ下火となった。彼の勝利はもはや明らかであった。彼は今や誰もが認める大いなる使徒である。しかし彼は過ぎ去った数年間のつらい経験を思い出さざるを得なかった。彼は何年も用いた同じ武器を再び取り、「召されたる」の一語を付け加えざるを得なかった。語は一字である(原語は *κατανοήσας* (クレートス)、しかし意味は無限である。そしてこの語を記した時の彼の感慨もまた無限であったことと、私たちは思う。

教会に頼らず、教派を恃たのまず、独り立って福音を世に広めたパウロは、偉大な独立伝道者であった。彼の使徒であることは、「召されたる」という一つの事実の他に何の根拠もないものであった。しかしながら、伝道者として「なくてはならないもの」はこの一件であって、他のすべてはあるもなくても良いものである。そして他のすべてを具備しても、この一件なくば伝道界の無資格者である。すべて真の伝道者は、自ら進んで伝道者となった者ではなく、神に召されて否応なしにこの務めに当ることになった者である。このような者においては、形式上

の資格はあるも良し、無きも良しである。「あなたは正規の神学校を卒業し、牧師試験に合格したゆえに真の伝道者である」と言うか。去れよ、そのような伝道者は神の国に用がない者である。「あなたはその知識と徳望と技能とのゆえに好適な伝道者である」と言うか。去れよ、そのような伝道者は僭越で偽りの徒である。ただ召されて伝道者となりし者のみ、たとえその外形は「世の汚物また万の物の塵垢の如く」なるとも真の伝道者である。そして実際は単に伝道者に限らず、すべて真のキリスト教徒は「召されたる」キリスト教徒である。自らなろうと欲してなつたのではなく、父によつて信仰を与えられ、父の聖なる召しによつて信仰生活に入ったのである。もちろん洗礼の有無、所属教会のいかんなどは問題とならないのである。しかしながら、「召されたる伝道者」、「召されたるキリスト教徒」と自称する者が、必ずしもすべて召されたる伝道者、召されたるキリスト教徒ではない。その中に偽つてこう称する者がおり、また幻想によつてこう信ずる者がある。真実あるところに、偽りは影のように伴う、これは大いに注意すべき点である。

第一節に含まれる第三の思想は、「神の福音のために選ばれたるパウロ」である。「神」といい、「福音」といい、「選ばれたる」という、いずれも重要な語である。「選ばれたる」は選別されたと訳するのが良いとする。原語の *καθαρὶ μὲν εἰσὶν* (アフォーリスメノス) は、別にせられたる、他より分たれたる、選び置かれたるなどの意味を持つ語である(英語の *separated; set apart*)。ある時の用途のためにあらかじめ選別し置かれたるを意味する。パウロは福音宣教の使命のために、このように選別し置かれた器である。これは彼にとつて根深い確信であつた。それでは聖召と選別の区別はどうかという問題が起こる。この問題に光明を投ずるものは、数年前に彼が発した

語である。すなわち、ガラテヤ人への手紙一章十五節に「しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神」とある。この「選り出し」は羅馬書一章一節の「選り出された」と同じ語、また「召し」は羅馬書一章一節の「召されて」と同じ語である。すなわち、彼はあらかじめ選り置かれて、ある期間を経た後召されたのである。彼は元来「神の福音のために選り出された」器であって、時が来て遂に「召されたる使徒」となった者である。

人は様々な器として選ばれる。福音のために選り出された人の中にも、あるいは預言者あり、教師あり、牧師あり、あるいは全教会の統率に当たる器あり、あるいは事務を執り、または施しに従う器あり、種々様々である。そしてパウロが福音のために選り出されたというのは、もちろん福音宣教のために選り出されたのである。ゴデーのような学者は、「福音」という語は新約聖書においてはむしろ福音宣教を意味すると断定している。その見方の正否は別として、パウロが事実上福音宣伝のために選り出された器であることは誰もが認める所である。「福音」は原語で *euangelion* (ユーアンゲリオン) という。実に美しい語である。美しい思想を伝える語は美しい響きを持つ。前に「奴隸」という痛ましい(文字の表面は)語を発し、次に「福音」のために選り出されるという美しい語を記す。ここにまたパウロ独特の対照があるのである。ユーアンゲリオンは「よき音信」を意味する。英語において *gospel* (ゴスペル) が *good spell* すなわち「よき言葉」を意味するのと似ている。パウロは実にこのよき音信のために選り出されたのである。神の怒りの器としてではない、神の刑罰を世に伝える使者としてではない、実に神のよき音信を世の人々に伝える使い人として選り出されたのである。何者の栄誉がこれに勝ろうか、いかなる幸福がこれに比

べられようか。

羅馬書の冒頭にユーアンゲリオン（福音）の一語があり、この書簡の性質は明らかである。パウロが福音の使徒であるということは、羅馬書が福音の大きいなる証明書であることを示すのである。そして福音とは喜びの音信、歓喜の伝達、赦免と恩恵と平安とを盛る一大宣言である。そしてこれを述べるのが羅馬書である。歓喜をもって始まり歓喜をもって終わるのがこの書である。その中に罪の指摘がないではないが、これは光明に到達するための前提となる暗黒であって、決して暗黒をもって終わる所の暗黒ではない。恩恵はこの書の基調である。歓喜と平安とがこの書に満ちあふれる空気である。これはパウロ彼自身が恩恵の上に確立し、歓喜と平安とに満ちあふれた人であるためである。

一節を全体として顧みよ。パウロはイエス・キリストの奴隷であり、召されたる使徒であり、神の福音のために選別せられた者であるという。この中に彼の謙遜があり確信があり、信賴があり覚悟があり、感謝があり歓喜があり、経験を盛った語であると同時に、また教訓に富んだ語である。ローマの信者はこの書翰を開いて、まずこの第一節に接した時、あたかも恋人からの便りのように、言い知れぬ喜びを味わったことであろう。かつてこの世が生んだ最大のキリスト教徒、最大の伝道者である異邦使徒パウロの書簡冒頭の語として、私たちは羅馬書一章一節に限りない興味を覚えるものである。

次は第二節の研究である。「この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので」という。「預言者」という語は、狭義においてはサムエル以後預言の聖職に就いた者を指すのであるが、広義

においてはモーセまで遡ることができ、またモーセ以前のいわゆる「列祖」を含むこともある。そしてメシヤの出現の預言は実に旧約聖書全体を通じて存在するものであって、旧約の基調は明らかにメシヤ預言である。ゆえに第二節の「預言者たち」は、最大広義に取るべきものである。まことに神はその預言者たちを通してメシヤの出現を聖書において約束された。それゆえイエスは「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを喜んだ」（ヨハネの福音書八章五十六節）と言い、また「もしも、あなたがたがモーセを信じているなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから」（同五章四十六節）と言われた。また主の復活後、福音宣教の最初においてペテロは使徒の信念を代表して言った。「モーセはわたしたちの先祖たちに告げて言いました。『あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者あなたがたのために起こされる』……またサムエルをはじめ、彼に続いて語った預言者もみな、今の時について告げ知らせました」と。このように神は重ね重ねその預言者を通して福音確立の日があるべきことを約束された。それは私たちが旧約聖書の各所に発見するところであって、ひとたび預言者の筆先がこのことに触れるや、その思いもその言葉も共に口調が熱を帯び、花のような美しさと蜜のような甘さとがその言葉を彩り、妙なる希望の美曲を奏で出すのである。旧約聖書をして希望に満ちた書たらしめるのは実これである。実にメシヤ預言は旧約の肉の肉、骨の骨、髓の髓、生命の生命である。

パウロはこのような巨大な旧約的背景を第二節において記したのである。そして自分が唱道する福音は、決して自己創造の教説ではなくして、古くから預言者のあらかじめ示したことで、すなわち預言者を通して神が約束さ

れたことであることを主張したのである。ここにパウロの拠り所がある。ここに過去数千年が彼の後援者として立つ。彼が聖書をもつて自己宣伝の福音を擁護させたところに、彼の周到な用意と、また真の伝道者たる特徴が存在する。私たちは古き聖書に拠る時が最も確実である。自己発明の新説を唱道する時が最も不確実である。それは古き聖書の教える所は永遠に新しいのに反して、人間が造つた新説はたちまち旧説となり道端に捨てられるためである。今や人々は古き聖書を捨てて、いたずらに新説から新説へと転々とし、そして聖書に示される神の道を閉却して、人の所造にかかる様々な学説教義を説明し、講述し、研究し、遵奉し、もつて得意としている。実に危うき極みである。ああ人よ、早く空しい努力を去れ、そして永遠に新しくかつ真実な神の言葉に頼れ。

最も進歩的な人であつたパウロは、また最も保守的な人であつた。彼は古き聖書に頼り、古き預言をもつて最も新しき福音を擁護させた。彼を称して矛盾の人と言うなかれ、むしろ偉大な人と言え。進歩と保守とを一身に兼ねてこそ、人は初めて偉大なのである。およそ人類の歴史に一大時期を画した偉人は、概ねこの種の人である。ルターはどうであつたか、クロムウェルはどうであつたか、リンカーンはどうであつたか、グラッドストーンはどうであつたか。グラッドストーンが進歩的大政治家であることは誰もが知るところであるが、その信仰がすこぶる保守的であつたのもまた著明な事実である。その他ルター、クロムウェルなど、いずれも敬虔なる使徒時代の信仰の所有者であつた。進歩と保守とが一致するところ、旧と新との融合するところ、そこに真に純粹なものが生起する。パウロほど進歩的な人はなく、またパウロほど保守的な人はいなかった。これが彼が人類の中で最も偉大な人であつた明白な証拠であると思う。